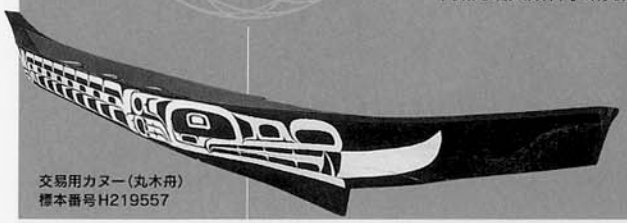
地球を集める

クワクワカワクの丸木舟

岸上 伸啓
（きしがみ のぶひろ）
本館先端人類科学研究部



交易用カヌー（丸木舟）
標本番号H219557

特別展「ラッコとガラス玉―北太平洋の先住民交易」を二〇〇一年に開催することになり、準備を開始した。わたしの担当は北太平洋の東側にあたるアラスカからカナダの太平洋側にかけての先住民族の交易であった。

この展覧会の目玉のひとつとして、クワクワカワクの交易用の丸木舟を展示しようということになった。しかし国内にはなく、現地で収集するか、外国から借用するかのいずれかだ。わたしたちには、かの有名な人類学者フランツ・ボアズの調査に協力した先住民ロバート・ハントの孫にあたるグローリア・クランマー＝ウエブスターさんという力強い味方がいた。

そこで、わたしたちは彼女に意見を求めたところ、丸木舟を製作できる技術をもつ人がおり、技術の伝承のためにもぜひ、丸木舟を作りたいとの回答であった。作り手は、彼女の兄ダグラス・クランマーさんであるという。わたしたちはグローリアさんを窓口として、彼女の住むバンクーバー島のアラート・ベイを中心に先住民交易に関係する工芸品、儀礼道具、装飾品、そして全長約一〇メートルの丸木舟を収集することにした。

ひとは変わっても、思いは同じ

民博の現地収集の基本のひとつは、むかしから伝わるお宝を収集するのではなく、現地で製作してもらい、それを買いとるやり方である。この方法は、あらたに製作したものを買いとるわけだから、現地からのものをもち去るのではなく、現地に迷惑をかけることもない。むしろ現地には現金が落ちるし、製作技術の伝承にも一役買うことができ、現地のほうも大喜びだ。しかもときとして製作過程を詳細に知ることができる。

しかし、バンクーバー島で大型の丸木舟をあらたに製作してもらうことには一抹の不安があった。今から三〇年ほど前、民博の先輩たちはアメリカ展示を開設するべく、カナダの北西海岸先住民にトーテムポールの製作を依頼したはよいが、一年近く経っても現地から音沙汰なしであった。心配した館員がカナダに飛んだところ、トーテムポールは完成していなかったという。現地のベースで、あまり時間にとらわれることなく製作をしていたようだ。ご存知のように、日本は単年度で会計がしめられる。三月末までに購入し、支払いを終了すべきであった。担当者は、胃の痛む思いをしたという。

収集は忍耐

それから二〇年以上が過ぎた二〇〇〇年の夏、わたしはアラート・ベイを訪れた。そのときまでには、丸木舟が完成しているはずで、明後日には、カナダ日通のトラックが村まで来ることになっていた。グローリアさんのところを訪ねると、開口一番、申し訳なさそうに「丸木舟はまだ、完成していない」という。目の前が真っ暗になったが、当面は、丸木舟以外の木箱、楽器、仮面、ビーズ製のネックレス、銀製の腕輪などを地元で収集することにした。カナダ日通の方には電話で連絡し、大型のトラックではなく、中型のトラックでよいと知らせたが、手遅れだった。翌日には、愛想のよい中国系カナダ人ドライバーがやって来て、まる一日かけて梱包し、翌日、アラート・ベイを去った。

わたしは丸木舟を製作している工房を訪ね、完成の時期を確認するとともに、日本からもってきた小切手で代金を全額支払った。後ろ髪を引かれながら、アラート・ベイを後にした。

それから二カ月経っても、現地からは音信不通である。すでに一一月にわたしは現地に丸木舟を受けとりに行くことになっていた。心配になって、当時、バンクーバー島のキャンベル・リバーでフィールドワークをおこなっていた立川陽仁君に頼んで、現地に行って様子を見てもらうことにした。わたしの出発の二週間ほど前のことである。

現地からメールが届いた。まだ、丸木舟は完成していないが、わたしが到着するころには完成するだろうというものだった。わたしは不安をいだきつつ、ふたたびアラート・ベイに向かった。

二度あることは三度ある

到着すると、またもやグローリアさんが「船首にひびが入ったために、その処置で、完成が遅れている」とすまなさそうにいう。二人で工房を訪ねてみると、ほぼ完成していたが、船体にウミヘビの図柄の下絵を描いているところであった。また、トラックをキャンセルするはめになってしまった。特別展示の開幕までは、時間があるものの、会計年度が終わるまで四ヵ月をきっている。とりあえず、ほかの標本の収集をおこない、また、後ろ髪を引かれながら現地を去り、別件の調査に向かった。

その後、バンクーバーにあるカナダ日通から日本に何度かメールが入り、丸木舟を現地にとりに行こうとしたが、完成しておらず、何度もキャンセルされたとのことであった。先輩たちの思い出話が頭を横切ったが、ひたすら待つよりほかになかった。年が明ける直前に、グローリアさんから完成したとの朗報が入った。

一安心したとたんに、今度はカナダ日通からメールが入り、バンクーバーまでトラックとフェリーで運んで来たものの、丸木舟には水がたまり、すぐには日本に船便で発送できないとの知らせであった。あとでわかったことだが、先住民の人たちは、輸送中に丸木舟にひびが入らないように、その内側に水をはり、トラック輸送をさせたそうだ。バンクーバーで少し船体を乾かせてから、それは輸送船で太平洋を横断して、年明けに大阪に到着した。

ふりかえれば、製作依頼から民博に届くまで一年以上かかったことになる。無事、特別展示も終わり、今、その舟は収蔵庫に眠っている。近年、これだけ大きい丸木舟の製作は、稀である。その理由は、丸木舟を作ることができるほどのシダーの巨木が、この一五〇年あまりの森林伐採でバンクーバー島にはないこと、さらにその製作技術をもつ先住民の数が限られていることである。忍耐に忍耐を重ねて手に入れた丸木舟は、わたしにとっては、思い出に残る逸品である。

アラート・ベイの海岸通りを、漁港から望む

北西海岸一帯を覆うレッドシダーやイエローシダーの森林

丸木舟にウミヘビの下絵を描くダグラス・クランマー

丸木舟の製作をおこなったアラート・ベイのクワクワカワク